

---

# ORUGURE IVE BLOOD VAN PAI ASAIN HEARTS」

コアス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ORUGUREIVEBLOODVANPAIASAINHERTS

### 【Nコード】

N0985N

### 【作者名】

コアス

### 【あらすじ】

大都会紅夜町の紅夜明暗学園高等部1年E組に通う主人公園籠寺草魔は幼馴染の委員長達と普通の日々を過ごしていた普通の高校生。血と身体能力は超人並。だがある日ヴァンパイアを名乗る少女との出会いと彼女のやっている争いにより彼のこれまでの日常は非日常へと変わっていく。彼の周りは騒がしくなっていく。

## Episode 1「DEATHSTINYBLOOD」運命の血の印と出会いの罰

どうもコアスです。このオリジナルノベルは@ggeamsの俺力才スエイジとしてやっていたのからの転載して一部修正しました。では

〔紅夜町〕

「Z／／／．．．」

ピピピッ！ピーー！

「オッワア！？ヤッベえよマジに遅刻するっ！。どうするよ俺さ？」

「あー、もう早くしてしなさいよ私まで遅刻して先公に怒られるじゃない」

「あー、もうだったら才前は先に行つてればいいだろうが誰も才前なんか頼んでいないんさ」

「転勤していったアンタの母親に頼まれたんだから仕方ないじゃない！アンタがホントに馬鹿だから．．．」

「余計な事を．．．」

俺は園籠寺草魔「紅夜明暗学園」高等部1年。自分で言うのもなんなのだが泣きたくなるような学力壊滅、社会、国語、理科以外、今まで彼女なし！の草食系男子．．．。唯一取り柄になっているのは不屈の超人的体力と健康過ぎる血だけなんさ．．．。

「でもいくらなんでもこの時間じゃぜってえ遅刻確定さあー」

「早くしろ」

俺の幼馴染の藤倉叶美ときたらしつめのなつてない小型犬の遠吠えのようにうるさいんだよなあ．．．。黙ってさえいればまだ可愛げがあるんだけどな．．．。ウチのクラスの男子共もこの鬼委員長には1歩も近付こうとしないからなあ．．．。

〔放課後〕

「あー．．．マジで今日もダルかったさ．．．。ん？」

ガキン！ガキン！

「なっ．．．なんなのさアレは！？」

俺の頭上遥か上で美少女二人が戦っていた。俺は急いで裏路地に隠

れて事の成り行きを見守った。

「いい加減に諦めて血を吸わせなさいな」

「クツ・・・ま・・・まだよ！・・・まだ・・・諦めて死ぬわけにはいかないのよ・・・」

「往生際が悪いわね。・・・そんなにまだ苦しみ続けたいというわけね・・・いいわ！まだまだ存分に悲鳴を上げさせてあげるわ」

「やめろおー！」

俺はいつの間にかとっさに飛び出した。すると・・・

ポオツ！ 俺の手から炎が出た。

「なっ！？・・・この炎は「オルグレイヴサイン」！！？あの少年か！？」

チャキン・・・

「ハア・・・ハア・・・このまま生を終えるわけにはいかない・・・から・・・。「血印術水霊斬結印」！！・・・」

「なにつ！？まだ力が残留していたか・・・チツ！覚えとけよ」

少女の一人はどこかへ消え去っていった。

「や・・・やつと・・・帰ってくれた・・・。ハア・・・ハア・・・もう・・・」

「ちよ！？」

もう一人の少女はあまりにも傷付きすぎていたために力尽きてしまい落ちてきた。

「・・・イテテ・・・。オイ、君大丈夫か・・・！！？」

俺の運命は声をかけ少女の体の異変に気付いた時から回り始めていたのだ。

「なっ・・・！！？なんなんだこれは！！？」

少女の体から出ている血の色が青色だったのだ。

「・・・今はとりあえずこの子を助けることだけを考えよう・・・間に合ってくれよ・・・」

俺は少女を背負いながら全速力で家に帰った。登校、部活、体育以外でこんなに走ったのは久々だ。そして、一晩中つきつきりで看病

した。

（翌日）

「ヤツバ！ああっ、そうだったw」

気付いたらいつの間にか爆睡してしまっていた。運良く今日は休日だったので安心した。だがたとえ学校でもこの子を残していくわけにもいかないさ。

「う・・・うう・・・／＼／＼ここは・・・」

「やっと目が覚めたか。よかつたさあー」

「あの・・・あなたは・・・？」

「んあつ？俺か？俺は紅夜明暗学園高等部1年園龍寺草魔。唯一の取り柄は超人的な体力と健康過ぎる血なんさ」

「！・・・あ・・・あの・・・」

「ん？なんさ？」

「あの・・・少しだけ・・・ほんの少しだけ・・・あなたの血を吸わせてもらえませんか？力を使い果たしたから・・・。それとあなたなら血の契約の衝動にも耐え切れそうだから。契約・・・キスしてください！」

「はっ！！？」

今なんていったのかなあ？

「ダメ・・・ですか・・・？」

「い・・・いや・・・そういうわけじゃ・・・」

「だったらあなたの望み叶えてあげますから」

「望み？」

俺の思考は瞬時によからぬ妄想モードへ・・・よし！

「じゃあ・・・俺のお姉ちゃんになってほしい・・・というのは・・・」

「

「いいよ」

「んで・・・君の名前は？」

「あっ・・・すっかり忘れてしまいました。私は姫美花。水の血族のヴァンパイア。他の血族達の血印の力を巡る殺し合いに参加

させられることになったんです。でも私はあまり・・・」

「・・・その先はもう話さなくていいんさ・・・」

姫美花お姉ちゃんは今までどんなに苦しんでまた傷付いたのだろうか・・・これ以上詮索するわけにはいかなかった。

「じゃあ血の契約を・・・。聖水血印の錠」血現」

チクリ・・・

「ッ・・・！」

「オイ、大丈夫なんさ!？」

「へ・・・平気ですでは・・・」

「ン・・・」

俺のファーストキスが交わされた瞬間だった。

続

Episode 1「DEATHSTINYBLOOD」運命の血の印と出会いの罰

どうでしょうか？たくさんの感想を心よりお待ちしております！7話まで転載しますのでよろしくです。

## Episode 2 「初戦と修羅場!？」

衝撃的な出会いから翌日……

「……zzz」

「弟君、早く起きないと遅刻しちゃうよ」

「……姫美花お姉ちゃん……」

「よしよし、血の拒否反応もなしだね」

「血……か……」

俺は今日から姫美花お姉ちゃんと学園に通うこととなった。でも、彼女は普通の人間ではない。水の血族のヴァンパイアだ。これから彼女の正体を隠しながら生活していかないとならない。

「早くいこうよ弟君」

「あのお……姫美花お姉ちゃん？」

「んー、なににー？弟君」

「朝っぱらからこんな密着状態で登校するのは非常に危険というかなんとというか……」

「あつ……そ……そうだね……」

「あつ……いや別に嫌とかいうわけじゃなくて……」

「いいよ家でターツプリ甘えさせてあげるからね」

「……そういやクラスどこになったんだ？」

「ウフフ……それはみてからのお楽しみ」

「……嫌いな予感がしたよう नाही ような……」

「!くるわ!」

「えっ!? 敵かよ!?!」

「「血印解放」!!! 「聖水血印の錠」具現化!!!」  
姫美花お姉ち

ゃんは戦闘モードを解放する!

「よし俺も」

俺も炎の力を使う。

「前日」

「弟君のその炎は「オルグレイヴサイン」といわれるヴァンパイアが苦手とする血裂の印炎・・・だから敵の動きを一定時間封じられるから」

とかいつてたよな。

戻って」

「あーら逃げないのねいい根性なこと」

「あなたはどこの血族？私は水の血族の園龍寺姫美花」

「フン・・・まあいいわ名乗ってあげる。私は闇の血族の閻羅井月雪！あなた契約者がいるのね」

「そういうあなたはいないようね。こっちのほうはあなたより有利よ」

「それはどうかしらね。「血印解放」！！「閻月の双鎌」具現化！！」

「1今だ！「オルグレイヴサイン」解凍！！」  
隙をつき炎を解凍させる。

「なんですって！？この子「オルグレイヴサイン」の持ち主！？・・・仕方ない・・・ここは退かせてもらっわね」

「逃げるな」

「バイ」

「・・・ヤッベ学校」

「あー！！」

）1年E組教室）

お姉ちゃんは今上だし離れ離れになるのは寂しいけど。だが・・・

「オイ聞いたか？草魔」

悪友の黒塚伊理也がなにか騒いでる。それどころか他の男子共も。

「なにをさ？」

「美少女転入生が今日二人来る事」

「・・・ものすごく嫌な予感が当たりそうなんだが・・・」

「？なんの話だ？」

よしコイツ等は無視しよう。

キーンコーン

「転入生を紹介する」

そして予感的中してしまった。

「お・お姉ちゃん!？」

「なにー!?!？」

なんで姫美花お姉ちゃんがよりにちよって俺のクラスに!？ いや

それどころか・・・なぜ1年!？

「私弟君と同じ年だよ」

「へっ?」

彼女の身長が178の俺よりも高いからてっきり年上かと思ったのにそういうことかあー・・・。

「草魔あー・・・」

「貴様ー・・・!」

男子共が鬼のような形相でにらんできた。

「んげっ!？ま・ま・まてこれには深すぎる理由が・・・」

「問答無用!いつからだ!?あんな美少女と」

・・・別の意味で契約したんだが・・・

「アンタら静かにしなさいな。」

「委員長は黙っててくれ」

「なあんですってえー・・・」

「ひいー!?!」

く放課後く

「あの・・・」

「あれ君は夢中夢雪さん」

今朝のごたごたで紹介できなかったのだ。

「屋上にきてもらえませんか?」

こ・ここれって生まれて初めての・・告白?でもこの後予想外な出来事が・・

く屋上く

「園龍寺さんあなたのこと1目見て好きになりました。私とキスしてください!」

「ちよっ・・・ま・・・」

キスされた瞬間の感触が・・・!!これは・・・血の味!!?まさか夢中さんって!!?」

「弟君!彼女は・・・!!?間に合わなかった・・・」

「あら彼とはもう血の契約しちゃったわよ」

「閻羅井さんなのか!?!」

彼女は偽名を名乗って俺に近付いてきたのだ。

「あなたのその力がほしくなったのよ」

ただそれだけの為に俺はキスされた。

「あなた・・・」

それで・・・何!?この修羅場!?

続

Episode 3 「湧き上がった炎と血そして裏切り」 (前書き)

3 話目

### Episode 3 「湧き上がった炎と血そして裏切り」

「・・・なんであなたがここにいるのよ!？」

「あーら悪いかしら？」

「・・・」

「いい？あなたは今日から私の奴隷よ」

「はあっ!？」x2

いきなり何を言い出すんさ。つうかキャラ違う・・・っていうかこの修羅場どうにかしてくれなのさあー・・・。

「いい？別に本当に好きってわけじゃないからね」

「・・・泣」

「ちよっと！あなたみたいな根暗に私の弟君を渡したくないわ」

「でも同じ契約者のヴァンパイアが争う気？」

「うぐ・・・」

「・・・」

その日から女難？の嵐そして二人のケンカが始まってしまったのだ。つた。

「アンタ最近雪さんになにされているのよ？」

「言えない・・・。断じてもこの肉食系女にバレたりしたら一緒になつて俺をパシリにしそうだ・・・。

「なんでもねえさ・・・」

「フーン・・・ならいいけど」

「弟くん」

「ワッ!？ちよっ・・・ちよっとお姉ちゃん皆が見てるって・・・」

ギロリッ!

「ヒイツ!?!？」

男子共の痛い視線が俺に突き刺さってくるんさ・・・。

「来たわよ」

「!もう私と弟君の仲を邪魔しないでください!ってえっ!?!?もう

こんなときに・・・」

（屋上）

「「血印開放」！！」×2

「「オルグレイヴサイン」解凍！！ブルーBLOOD起動！！・・・  
どうやら今回も契約者がいないようだな・・・」

「お久しぶりね。姫美花さん」

「あなたは！！」

「知っているんさ！？お姉ちゃん」

「私は自然の血族のヴァンパイア、葉出水璃音」

「なんで・・・璃音ちゃんが私を・・・同盟を結んでいるのに・・・  
あの日の約束はなんだったのよ！」

「どうやらこの二人にはなにかあるらしい。」

「あなたに私を殺すことができるのかしら」

「「水霊翔波斬」！！」

「甘いわね。「葉縁集霊波」！！」

「きゃああー！！」

「お姉ちゃん！この・・・」

「「オルグレイヴサイン」ですか・・・こんなの・・・」

「コツチを忘れています。「闇十架血印旋」！！」

「・・・」

「今です！「結印崩壊陣」！！」

「クツ・・・」

「このままトドメをさします」

「やめてえー！！」

「なっ！？なにを・・・」

「お姉ちゃん？・・・」

お姉ちゃんは涙を浮かべて・・・

「璃音ちゃんを傷つけないで・・・お願い・・・だから・・・」

「私を助ける気ね・・・まあ今度こそ会ったら殺してあげるわ。でき  
るだけ苦しませないわ」

「……………なんで……………」

「一体過去にあの子とお姉ちゃんの間にはなにがあったのだろう…」

これは次の話で……………。

続

Episode 4 「過去と今の境界」 (前書き)

4

## Episode 4 「過去と今の境界」

「なぜ止めたの!？」

「グス・・・グス・・・」

まだお姉ちゃんの悲しみは止まっていけないようだった。

「あの子と何があったんだよ?話してくれさお姉ちゃん」

「弟君・・・」

なんとか落ち着きを取り戻したようでゆっくりと語り出した。

「私、水の血族達と璃音ちゃん、自然の血族達の間では血の同盟が結ばれていた。私達も2年前に約束を交わし合ったの。絶対に自分達どうしで力の奪い合いはしないって。・・・でも・・・なんで・・・なんで・・・どうしてなのよ!!!?・・・」

「お姉ちゃん・・・」

「あなたが自然のヴァンパイアを殺せないなら私がやるわ」

「待ってくれさ!閻羅井さん」

「私に口答えするつもり?奴隷さん」

ポオツ!!

「今はそれどころじゃないだろ!」

「ひうつ!?!」

俺はグレイヴサインを閻羅井さんに向けた。もちろん脅して

「そんなこと言うのなら俺は君を殺すよ?」

「・・・仕方ないわ。我慢しといてあげる」

「・・・」

お姉ちゃんとあの子の絆を取り戻させる・・・。そしてこの子たちを守るように力を・・・。

「・・・一つ条件があるわ」

「ん?」

「私と・・・デートして頂戴」

「はいい!?!」

「おっ・・・弟君を・・・あなたなんかには渡さない・・・」  
「バツッ！」

「お姉ちゃん!?!」

「大丈夫気を失っているだけだから・・・で受けてくれるわよね?」

「はい・・・」

俺には別の意味の試練も迫ってきていた。

続

Episodes「デートクロスVANPAIA」(前書き)

5

## Episode 5 「デートクロスVANPIA」

「……はあ……なんでこんな事になるのさ……」  
俺はスケジュール表を見ながら溜息をついた。前回、お姉ちゃんの無二の親友であったはずの自然の血族のヴァンパイアを戦えないお姉ちゃんにかわって闇羅井さんが戦おうとしたので俺は慌てて止めたのだが闇羅井さんは条件を出してきた。それも……デートしてほしいと……

「だからってなぜにデートになるのさ!？」

「今更取り消しというのはなしよ。あなたは私の……ド・レ・イ……なんですからね」

「……分かったよ……」

今の間はなんだったんだろう?……と聞くのはあとが怖いのでやめにした。

「いい・明日のお昼頃、商店街で待っているからね」

「あー、はいはい」

〈翌日〉

「ぶぐ……ひぐ……ごめんね……私のせいで」

「やっと落ち着いたな。謝ることはないさ」

「やっぱりあの子と行くの?」

「ああ、じゃないとあとが怖いしお姉ちゃんの……」

「……」

「じゃあ午後7:30〜8時までには必ず帰るからさ……。行ってきます」

「……いつてらっしやい……」

〈商店街〉

「……」

「おーい」

「やっと来たわね」

「んじゃ・・・」

「早速行くわよ」

）・・・）

俺達はカラオケ、ゲーセン、美術館その他色々回った。

「じゃあ、私ちよつと行きたい所があるから1時間後にココでおちあいましよう」

「俺もついていこう」

「ついて来ないで！男子禁制！」

「はっ!？」

禁制つて・・・どこに行く気なんさ？

）1時間後）

「もうそろそろ時間だよな・・・ってはいいー!?!?・・・」

俺は突然の驚きと驚愕に目を奪われてしまった。なんと・・・閻羅井さんがゴスロリ服だったからそれと・・・。

「なんだこの人達は!?!?・・・」

たくさんのおタク男共がたばになって倒れふしていた。

「吸ったのさ!?!?」

「この服買つて着替えたらナンパがうるさくて・・・大丈夫貧血寸前の1歩手前になるまでに手加減しておいたから」

「そつという問題じゃないさ!」

「アラ、あなた私に他の男が近寄っていいとでも?」

「・・・」

怖いです。その一言に尽きる。

）・・・）

閻羅井さんとのデートがようやく終わり、家に帰ったのだが・・・

「お姉ちゃん具合は・・・!!?!?えっ・・・なんで・・・!!?!?」

お姉ちゃんがいなかったのだ。窓も全開になっていた。

続

Editors 「戦い」再確認 (前書)

6

## Episode 6 「戦いと再確認」

「・・・どうしてなのさ・・・」

「探さなくていいの？」

「もちろん探すさ。大切な人だから」

「・・・」

↳その頃↳

「・・・」

「ニヤアー・・・」

「君も一人なんだね・・・」

「ニヤ!? シャアー!」

「なにどうしたの?・・・えっ!?!」

↳戻って翌日↳

「・・・なんでなのさ!?!?・・・」

「・・・で私にどうしてほしいと?」

「・・・探査能力とかないのかさ?」

「そんな都合のいいこと考えないことね」

「そんな・・・。どうすればいいんさ!?!」

「そうカリカリしないの。・・・!ふせなさい」

「!?!」

ヒュッ!

「これは」

「「園籠寺姫美香を預かった。返してほしくば力をよこせ」」

「なん・・・だと・・・」

「いくわよ」

↳商店街中央ビル3階↳

「・・・」

「・・・かはっ・・・」

「姫美香お姉ちゃんを返せえー!」

「やっときたな。自己紹介しておこう。私は「邪」の血族ヴァンパイアのカハネ。アンタがオルグレイヴサインの持ち主でありこの子の契約者ね。さあ力を頂戴」

「絶対に渡す気はない」

「ああら。だったら私この子の血吸っちゃうわよ」

「う・・・弟君・・・」

「絶対に救う！」

ポオツ！！

「まだまだこんなものなのね・・・」

シュー！

「なに！？」

闇羅井さんの援護が入る。

「私は闇の血族よあなたの力は相殺できる。奴隷さん、私の血の力を使いなさい」

「ああ！「DARK BLOOD」発血！」

「ああ！私にも力が溢れ出してくる「闇錬双」！！」

ザシュツ！

「うおおおおー！」

ポオツー！！

「くっ、」

「今よ！「吸血結印」！！」

ガブ！チューー！

「うああああー・・・」

「ぶはっ」

「お姉ちゃん」

「・・・弟君・・・」

「なんで家を飛び出したり・・・」

「だって・・・。だって弟君が離れていってしまいそうで・・・」

「俺はお姉ちゃんから離れるなんてことはないぞ」

「・・・」

「ニヤアー」

「この猫飼っていいかな？」

「いいわ」

お姉ちゃんが無事でよかったです。家族も増えまし。

続

Episode 7 「激化する修羅場!？」 (前書き)

7

## Episode 7 「激化する修羅場!？」

「ニヤニヤアー」

「リニヤおいで」

「ゴロゴロー」

「……………」

お姉ちゃんが戻ってきてくれてよかった。でもこれからこんな修羅場があるとは……。

（教室内）

「聞いたか草魔また転校生くるらしいぜ!」

「またかさ!？」

「ということで学園長室へ忍び込んでくるぜ」

「捕まらない程度にな」

「そんなへマはしないぜ」

「どこからそんな自信が……」

キーンコーン!

「チツ……お楽しみでいいか」

「才前等早く席につけ。これから転校生を紹介する。入ってきなさい」

「ウオオー!!? すんげえー!!」

「……………」x2

「お姉ちゃん達どうしたんさ?」

「何でもないから……」

「そうそう……」

「?」

「今日このクラスに転校してきました燐輝灯です。」

「同じく燐輝音架ですわよ」

「燐輝羽根美です……」

「よろしくx3ですわよ」

「超美人三姉妹ときたかあーくうー」

「あはは・・・」

「・・・」

「お・・・お姉ちゃん？」

「弟君休み時間になつたら早退して」

「はっ！！？なにいつてるんさ！！？」

「いいから」

俺達は理由も分からずに早退することとなった。でも・・・。

「・・・」

「クツ・・・やっぱりですか」

転校生がなぜか俺の家に行った。

逃げるためだったようだ。

「お兄ちゃん」

「お兄様」

「兄様逃がしませんわよ」

「君達ヴァンパイアなのかさ」

「キスしよー」

「こ・・・これは契約ですからね。べっ・・・別に・・・」

「お兄様・・・んー・・・」

「えっwちょw・・・」

「お・と・う・と・く・ん？」

「ド・レ・イさん？」

「弟君の不潔うー！」

「私だけの奴隷よ」

二人にビシバシ！とビンタを喰らってしまった。

修羅場めえー・・・泣

続

Episode 7 「激化する修羅場!？」 (後書き)

Episode 8 「不良と感情と覚醒」 (前書き)

8

## Episode 8 「不良と感情と覚醒」

「ハア・・・」

またまたヴァンパイアが増えてゝしかも全員妹キャラ、修羅場がさらに又激化してしまった。灯は光、音架は雷、羽根美は鋼の血族であった。ゝお姉ちゃんに聞いたところ同じ血族同士が結ばれても同じなのが生まれることはあまりないらしい。

「ス・・・スミマセンでした」

「なにいきなり謝っているのよ？」

ところで俺は生徒会に呼び出されていた。

「いや・・・なんかしでかしたっけ？と思って」

「いやいや、そうじゃないのよ園籠寺君に頼みたい事があるの」

「嫌な予感・・・」

生徒会長の国田ひろ子は難題な仕事を押し付けることで有名だ。

「園籠寺君あなた最近女子数人に囲まれているんですってね。しかも全員転校生。」

「・・・」

生徒会にまで噂が広まっているとは・・・。

「だからこの不良女子を更正してもらいたいのよ」

「あまり関係無いような気がします・・・ってええっ!？」

生徒名簿を見せられて名前が入った。

「んげげっ！真田真由香あー!？」

学園の伝説・・・。

「無茶さ・・・」

「弟くん・・・」

「女王様キャラはもうご勘弁を・・・」

「私のことかしら？」

閻羅井さんの怒りをよそに俺は続けた。

「これというのも修羅場のせいだあー!」

「諦めなさいな。兄様」

「人事だと思つて！とりあえず奮闘してきます・・・」

「うん・・・頑張つてね・・・」

「そして」

「・・・んで・・・なんで才前がついてきているんさ！？音架」

「アラ、。兄様を1人で行かせたら心配ですから」

「才前は一体俺をどういう目で見ているんさ！？」

「え！？えーと・・・その・・・え・・・エッチで・・・ドスケベで・・・

シスコンな・・・私の・・・」

「ストップ！それ以上言うなさあー！」

「な・・・なによもう・・・！」

「・・・」

「フン！学園には行かないわ」

「やっぱし？」

「これくらいで引き下がつてどうするんですの！？全く・・・」

「アタシの居場所は学園にはない」

「そりゃああれだけ大暴れすれば・・・」

「シツ！」

「とにかくそんな気ないから」

「駄目なんさ・・・そんな生き方は。俺にできることだったら何で

もするさ」

「ハア！？アンタ馬鹿なんじゃないの」

「言つたはずさ。何でもするつて」

「！それまでは・・・つてキャツ！？」

「オワツ！？お・・・音架！？」

音架がなにか勘違いしたらしく俺を殴ろうとしてこけて俺とぶつかった。

「イテテ・・・！！？」

なんだこの柔らかいのは・・・

「！！！？兄様の馬鹿あー！」

「才前等出てけえー！」

「……」

「……アタシの馬鹿……」

「なら復讐すればいいじゃない」

「誰!？」

「一方」

「音架のせいで状況悪化しちまったじゃないか」

「兄様のせいですわ! あんなところ触るから……」

「ウグ……」

「翌日」

「才前結局来たんじゃないか」

「なんの心変わりなのか真田は来ていた。」

「ええ……生き方を変えにね……」

「えっ!？」

「彼女……なにかがおかしいわ」

「なんだって!？まさか……」

「放課後」

「さあ、早く来なさい」

「……これで私は変わる……」

「やはりね」

「真田をどうする気さ？」

「復讐のお手伝いをしてあげているだけ。私に見覚えはない？」

「なんで……生きているんだ!？」

「ソイツは邪の血族だった。閻羅井さんが倒したはずの……」

「まさかを影武者にするとはやられたわ。おかげで不味い血を飲む

ハメになったんだから覚悟しなさい」

「真田! 才前はソイツに騙されているだけさ。コツチにくるんさ」

「……アタシは自分……うっん世界を変えるんだこの手で……」

「

「真由香さん!」

遅れてきた音架が懸命に呼びかける。

「貴方はただ世界から逃げ回っているだけの負け犬ですわ。目を覚まして！」

「才前・・・ウルサイ！才前なんかアタシのなにが分かるっていうんだよ!？」

「それは・・・貴方の寂しさの感情だけですわね・・・でもね・・・貴方は自分から動き出そうとしない他人任せで世界を変えられると思っっているんですの?」

「そ・・・それは・・・。今はつきりと分かった。アタシを騙して人殺しをさせるような奴の口車に乗せられてしまったことを！許さない！」

「チイツ!」結印開放「!!ハッ!ちよございな死ね!」

「危ない!」結印開放「!!」雷電超電磁砲「!!」

「あっ・・・」

「しまった!当たってしまいますわ」

「俺がいくさ」

「に・・・兄様一体何をなさるおつもりですか!？」

「間に合ってくれえー!」

ドガン!

「アタシ・・・こんなところで死んでしまつのかよ?・・・」

チュツ!

「!!」

「な・・・なんだと!？」

「真田!？」

「なんだこの髪は!？」

真田の髪が黒から紅き炎髪に変わっていた。

「お・・・俺は水の血を与えたさ」

「彼女は炎の血族だったんですわ!100000人に一人の確率でしか生まれない」

確かに紅き血色は普通の人間となら変わりが無い。

「つていうことは……」

「「劫火と轟水の鎖」！！」

「うあああー！」

「今よ！」

ガブリ！

チユー！

（その後……）

「……」

「目覚めたさ」

「気を失っていたんですわ」

「！！！」

グワシ！

「な……なにを……」

「あ……アタシのファーストキス返上しろー！」

「ひいー！助けてくれえー！」

「諦めてくださいですわ。兄様因果応報ですわ」  
「全く……人の

気も知らないで……」

これからもますます修羅場が激化しちまったようだ。

続

**Episode 8 「不良と感情と覚醒」 (後書き)**

まだまだこれからも続きますよー！アドバイスと感想よろです。

Episode? 番外編? 「純血な機嫌?」 (前書き)

なんというか・・・番外編? つぽい話です。

Episode?番外編?「純血な機嫌?」

「商店街にて」

「……………」

「……………」

「……………空気がなんか重い……………まあそれはそうだよなあ……………」

「戦闘後」

「なんで……………好きでもない奴にキスされなきゃいけないのよ!?!」

「あれは事故なんだって。つつかまだそんなこと怒ってんのさ!?!」

「

「まあ……………おかげで炎の血族の上にハーフだということが判明したんですから今回だけは私にはなにも言いませんわ」

「別にドレイさんが誰とキスしようが私の知ったことじゃないですから」

「闇羅井さんはもちろんのこと音架も多少は納得してる様子で。でも他の皆は……………」

「弟くん!ファーストキスって女の子にとって二番目に大事なんだから」

「なぜか熱く語り出したお姉ちゃん……………ん?二番目!?!じゃあ一番目はなんだ!?!」

「お兄ちゃんそうだよ!」

「お兄様!」  
「灯達からもせめられる。どうしてえー?」  
「そして……………」

「はあ……………」  
「今の状況を手短かにいうと俺は真田真由香と仲直りするために強制的に外出させられてしまった。」

「これじゃ更正どころじゃないさ……………」

「ほら早くいくわよ。アタシだってアンタと一緒になのは嫌なんだか

ら

だったら早く機嫌直してくれ……。一体俺の財布をどこまで減らしたらいいんですか!?!?!?!?!」

「次アレー!」

「もういい!」

「なにっ!?!」

もう我慢の限界だ……。

「もう一人でどこにでも行けばいいだろ!」

「……フーン……アンタもアタシを蔑ますの……どこまでも……」

「お前はただ人を見ずに逃げてるだけなんさ!」

「逃げてる?アタシが?」

「分からないか?ならそれを俺が分からせてやるさ……」

「なっ……なにをっ……!?!」

「大丈夫」

俺はアルバムを取り出し真田に見せた。

「俺の両親は先月突然俺を残して転勤していった。俺は両親を憎んだ。鬼のような委員長に叩き起こされる日、これが恨み、が続いた。そしてお姉ちゃん達と出会って俺は分かったんだよ家族の絆ってもんを。お前も……」

「だから?みていうかそれ逆恨みじゃない?」

「絆を分かっていう話」

「そっか……アタシようやく分かったよ……アンタにも人を見る目があるってこと」

「分かってねえ……」

ようやく仲直りできたのか?」

（翌朝）

「ん?」

「おっは!」

「真田か……朝っぱらからなにしにきた?」

「アンタをわざわざ起こしにきてあげたんだよ文句あつか？」

「.....」

なんだこのフラグ？

**Episode? 「鮮血の分岐点」 (前書き)**

共通はここまで。次回からヒロイン別にやります。

## Episode? 「鮮血の分岐点」

「なんでお前がココにいるんさ!?!」

「別にいいじゃない。鬼委員長よりアタシの方がマシでしょう?」

「なにがしたいんさ・・・」

「あー!!なんで真由香さんがお兄ちゃんを起こしに来てるのー!」  
「?」

「弟くんヒドイよ!」

「あつこれはだな・・・」

「全く・・・」

いつもの日常・・・。

「へえー・・・誰が鬼ですってえー?」

「ヒイー!?すいません嘘です!つうか藤倉いつの間に!?!」

「ふん!とにかく遅刻しないようにしなさいよね不純異性交遊くんなに威張ってんだ?つうかなんか絶対勘違いされてる・・・。

「それはそうと一応だから確認しておくわ今日から海開きだから水着忘れないようにね」

「へッ!?今日からだっただけ?」

「先生の話聞いてなかったの!?!信じらんない!それと・・・」

「言いたいことは分かる」

お前の水着姿を見たいっていう輩はそういないと思うが・・・。

「ならいいわじゃ」

鬼の嵐が過ぎ去り・・・。

ちなみにうちの学園に服装の規制は特にない。だからこそ男の血が騒ぐ・・・。

「これはチャンス!・・・」

「弟くん!・・・」

別になにかが始まるうとしていた。

「水着か・・・」

俺が見たいと思うのは・・・。

Episode? 「鮮血の分岐点」 (後書き)

次回ヒロイン別に妄想が入り乱れる・・・ぶはっ！  
☆

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0985n/>

---

ORUGUREIVEBLOODVANPAIASAINHEARTS」

2010年10月10日13時25分発行